

堀田井上家古文書

「石垣原合戦実録全」

研修部

標記の記録は、堀田6の井上家(当主友介氏)に代々伝わっ

てきたものであるが、昭和四十五年に、古文書の損壊が酷くなつたのを憂慮した氏の御尊父故友光氏が、観海禅寺住職故林宗悦氏に解説を依頼し、孔版(ガリバン)の小冊子として保存していたものである。解説にあたって現代仮名遣いを援用しているが、この度「街おこし活動」にも携わっている井上氏の好意により、会誌『別府史談』に掲載する機会を得ることができました。

この「実録」の成立年代、筆者、内容など、原典に基づいて説明しなければならぬ点も少なからずあると考えられますが、まずはそのままを会員の皆さんに紹介して、今後の研究に資したいと願っています。(句読点は文責者注)

(文責 三重野)

(まえがき)

この実録は井上家に代々伝わるものであるが、損壊甚だしく判読も困難となる。よって当主井上友光氏その隠滅を惜しみ書替を納(のう) (僧侶の自称) に依頼す。古色を失うことは残念なるも、志ある人々の便宜を図り謄写にせしことを了解せられたい。

昭和四十五年五月十日

観海禅寺現住 林宗悦 識

黒田

石垣原合戦実録全

大友

慶長五年庚子七月上旬、江州佐和山城主石田治部少輔三

成、逆意を企て大谷刑部、増田右エ門、小西撰津守、安国寺、浮田宰相、長曾我部大藏、筑前中納言、小早川秀秋変心にて関ヶ原裏切也、立花左近将監宗茂、島津薩摩守一味同心にて都合其勢五万余騎、関ヶ原を発向して家康公を討ち奉らんとはかる由。

義統公このよし聞き給い、我れ朝鮮国征伐の時、太閤秀吉公の御前を背き、此の周防国山田に移され日を送りし所に、かゝる大事起るこそ幸なりと、家臣田原紹忍を召して

仰せ候には、しばらく合戦安否志されざるに、本国豊後を切從え秀吉公の味方仕るべく思うは如何かとありければ、吉弘嘉兵エ承り、御意ご尤もにご座候、隣国の義に候へば豊前国より仰合され御計らい下さるれば、向後の御意しかるべきかと申し上げる。義統公聞召し彼れ是れと延引せば本意遂げ難し、片時も急がんと方々に遣いし候ために、隣国に流浪し居たる臣下ども馳せ集まり、ほどなく其勢二百余騎になる。

黒田如水公この由聞付けられ、家臣森太兵エ、栗山四郎右エ門、久野次左エ門、野村市右エ門を召して、大友義統本領なればとて豊後に打入るべき由告げ来たる。我が長男甲斐守長政は、家康公に御味方仕るべくの志にて、本国に罷在る處にかかる事こそ幸いなれ、早々豊後に発向し大友を退治すべきなり。併し、先づ大友へ使を遣わし彼が志を計るべしとて、久野甚助、内野勘七を以て大神大学に申遣候には、貴殿本国なれば豊後へ御入国の由承り、思召ご尤に存候、左様御事に候はゞ先づ中津へお越しあるべきなり、宜敷相談の上豊後を相渡し申すべしと書を送りけり。

使者上の関にて大友に行合う、口上の趣申入るれば義統公御返答ありけるは、仰越され候条大慶に存じ候。さりな

から某、秀吉公の厚恩を請け候へば、今度家康公の味方存じもよらざる所なり、と答えられ直に義統公は豊後へ発向あり、浜脇の浦に着船し、朝見嶽に門出の旗を挙げたる也。その後立石を本陣に定め豊後筑肥の六ヶ国に廻文を廻しけるに、先づ國中より馳集る軍兵都合三千余騎とぞ記しける。

其頃同国杵付の城に細川越中の家来有吉四郎右エ門籠城す。先づ追落さんと宗像掃部を大将として大神堅助、柴田小六、広林下野、岐部山城守、都甲兵部、都合五百余騎差向う。松井有吉方便をめぐらし防ぎければ、大神柴田等討死す。されども寄手大勢なれば遂に二の丸まで切破られ本丸ばかりになりけり。

如水は家臣共を召し集め、大友豊後に着船の由注進す。勢付かざる先に馳向て退治せんとありければ、井上九郎右エ門申しけるは、御説の通り、大友久しく家と申し其上本国なれば、延引においては近国の勢が加わり大勢になり大事に及ばん、願くは一日も早く御出馬しかるべしとて、侍大将には井上九郎右エ門、栗山四郎右エ門、黒田伯耆、同惣右エ門、久野次右エ門、船引刑部、小林甚右エ門、原弥左エ門、三宅利右エ門、高畑弥平次、岡田三四郎、山脇權之助、小栗次右エ門、この人々を始めとして都合八千余騎、

九月九日中津出陣ある。

然る所に久野次右エ門老母申すよう、今度の御供心許なく思うなり。その故は昨夜不思議の夢を見る、御身が戰場に赴くに旗竿折るよと見て夢醒めぬ。今度の合戦勝利を得ること難かるべし、何とぞ君を諫め止め給えとありければ、次右エ門申し候は、仰せご尤もに候へども弓馬の家に生まる、身は、戰場にて討死にし骸を山野に曝し名を後代に上げ、以て侍の本意と仕る。然も夢は不定のものなれば却てこの夢吉事となり芽出度帰還陣仕るべし。これ程に催し立てたる合戦なればいかでか君をも止め参らせん、若しこの軍に討死せば母上殿にもお暇乞にて候。と言い棄て、ぞ出にけり、

斯くて如水公は諸勢に向いて仰せけるは、如何に方々、この川は如水がためには三途の川と思うなり。その故は今度大友を退治せずば二度とこの川を越えまじと、軍気ははげまし赤根峠に着き給う。此所に堅陣を張り使者を以て様子を聞き給うに、その夜半計りに告げきたる、大友は立石に籠り給うなりと。さらば二手に分けようとて、先づ一手は井上九郎右エ門、野村市右エ門、久野次左エ門、曾我部六右エ門、母里与三兵エ、時枝平太夫、池田九郎兵エ、富

田仁左エ門、三宅利右エ門、細江弥七郎、この人々を先手として都合三千余騎立石へ差向う。之は本組。

阿岐富来城にかかる人々には、黒田伯耆、同惣左エ門、母里太兵エ、小林甚右エ門、岡田三四郎、船引刑部、山脇権之助、松枝藤三郎、石松巴右エ門、原弥左エ門、同市藏、この人々を先手として都合其勢五千余騎、掛樋和泉守が城代伊井利右エ門、藤井九右エ門籠りたる阿岐富来に向い竹束を立て鉄砲数百挺にてすき間なく攻めにけり。城中も此處を先途と防ぎけるも、たゞく方便めぐらせ攻めければ、城中こらえかねたり。

しかる所に当国高田の城主竹中源助伊豆守方より使者を以て申し候は、今度大友退治のため出張仕るなり、味方に参らるべきか是非の返答承たまわらんとありければ、内々ご出陣の由承り及候、御勢加わり申さんと用意致し候とて長男を人質に先備えに出しけり。

さる程に先手横灘に着きしかば実相寺山に陣をとる。この様子大友方にも見給い、一番に吉弘嘉兵エ、宗像掃部を大将として小田原又左エ門、深江七左エ門、吉良伝右エ門、岐部山城、清田民部この人々勢を備えその日陣を張りにける。黒田方より母里与三兵エ、時枝平太夫、池田九郎兵エ、

七百余騎にて切つて出る。中にも与三兵エ高声にて呼ばわり、今日は黒田が内、母里、時枝とは我等が事なり、大友方に我れと思わん人々は出来て勝負し給えと一度にどつと馳せ出る。大友方にも宗像掃部、都甲兵部、勢を備えて切つて出て互に秘曲をつくし切戦う。母里、時枝が兵多く討たれければ叶わじとや思ひけん、味方の陣に引退く。

二番駆けの大将久野次右エ門、金の半月の兜を着し、曾我五郎右エ門その他相従え兵を引連れ進出で申し候には、「愚なり与三兵エ、もの数にはあらねどもこの久野が横鎗後見致すべし、先づその陣退き給うな返し給え」とののしりけれども聞きも入れず引きにけり。久野無念に思い三百余騎にてまっしぐらに切てかゝり、大音にて呼ばはりけるは、「黒田が内にて久野次右エ門と申す者なり、大友方にて我と思わん者は出来て勝負し給え」と真先に進みけり。宗像掃部士卒に下知して、唯今向うは黒田方にて一方の大将なりもらずな討取れ、と五百余騎にて駆け出る、中津勢、大友方の勝色と見えるを、久野諸卒を下知し、先に母里、時枝言甲斐なく引退くゆえに敵逃ぐると見たり。爰に万死一生の働きなくば味方の大事たるべきなり。義を知り恩を思う人々は続けや、とて真一文字に掛つて相戦う。久野が

手に十七騎切つてすて、十八騎目に宗像掃部に渡り合い火花を散らし戦いしが終に掃部を討取りけり。掃部の郎党これを見て、主人を目の前に討たせ何面目に永らえん、と大勢寄合い久野を真中に追つとり廻し、鎗三本にて突き落しけり、久野生年十九才にて比類なき働きして討死したりけり。

久野が内水留(?)新右エ門、真田作右エ門、「命は義によつて軽し」と進んで戦い、敵二十六騎討取り残らず討死す。曾我部五郎右エ門も敵七騎討取り、此方へ扣えけるが、久野が討取られたるを見て、扱も中津を出でし時如水公の仰せに、「久野が事若年なれば、其方頼む」との御事にてこれに付従いしに、久野を討死させいかでか如水公の御前に出づべしと、又大勢の中に馳せ入り都甲兵部に渡り合いしばし戦いしが互に勝負つかざれば、より組まんと入違い引組て上になり下になり、しばし組合いしが曾我部申候には、「某も今日限りの戦なり御辺我と組合うこと不祥なれ」と、曾我部五十三、都甲兵部三十九才にて差違えて死に候。松井有吉もここを先途と戦いけるが手負討死数多くなり一先づ諸卒に息を継がせんと本陣に引取りけり。

井上九郎右エ門三番目の大将にてありけるが、陣所地形先上りにて間に小高き所ありて合戦の場見えざれば、我行

きて先の様子を見計らいてこそ出べしと諸勢を動かさず、からの頭の兜を着し鳥の羽の指物さし、徒士八ばかり引連れ十町ばかり行きて見れば、久野、曾我部は討死し、松井、有吉も合戦に疲れ引退きけり。敵も芝生にて息を継ぎ休みけり。井上これを見てよき時分ぞとて馳せ帰るにも及ばず、采を持って早くかかれと招きけり、天野三郎右エ門旗奉行にて、柏の紋を付ける旗を風にひるがえし五百余騎にて馳来たる。

敵方いずれも馬より下りて居たる所に真近く進みより、一度にどっとかかりけり。其の時、茜の母衣かけたる武士深江七左エ門と名乗るを真先に進んで出る。中津方より天野久太夫と名乗りて鎗を合せしが、勝負つかざれば引組んで上を下へとかえしけるが、深江を取て押え首をかき落す。又大友方より小田原又左エ門と名乗って出る所を天野勘左エ門かけ合せ、これも引組て又左エ門を押え首を取る。

この時井上申し候は、「黒田内にて井上九郎右エ門とは我なり、今度豊後方にて鬼神という吉弘嘉兵衛殿はおはせんか出合給え」と、これを聞くより吉弘相笑い、井上がわれと望むは嗚呼がましと、二百余騎にて駈け出で大音にて申し候には、「当国にかくれなき吉弘嘉兵衛とは我事なり。

井上殿とは先年名護屋にて申し合せしかど、無念や今は敵となる事、武士の道に珍しからざる所なり」と組合す。吉弘は素鎗、井上は十文字にて戦い、井上は片腹を突かれ、吉弘は高手の脇を十文字にてしたたかかけらる。吉弘無念に思い鎗の穂首を切落し、五尺許りの大石を乗り越えて井上を討たんとせる所、井上が内、天野勘左エ門兄弟、加賀野新兵衛、森太兵衛駈け合せ、さんざんに攻め戦う。吉弘向う敵を二十七騎切り伏せ、はるかに引いて我が身を見れば、痛手うす手九ヶ所負いけるが、これまでと思ひ小高き所に駈け上がり、「黒田殿の御内にて我と思はん人あれば吉弘が首取て勲功にあずかれ」と呼ばわりけり。

されどもさいぜん手並を見て、さうなく近付くものもなし、かゝる所に後藤太郎助生年十六才、この様子を見て、何、吉弘鬼神にもせよ討取り高名にせんと、種が島に二つ玉を籠めて吉弘が弓手の脇を打ち通す。小栗次右エ門、小山のかげより走り出て吉弘が首を取る。吉弘生年三十八才にて比類なき働きをし討死したりけり。

大友家、宗像、吉弘討死すれば今はこれ迄なり、皆々討死せよとて駈け出し、井上を真中に取込め散々に戦いしが、井上は敵八騎を討ち取る。井上が内大村六太夫、大

友方の伝右エ門といえる武士と渡り合い鏝にて突き伏せ首を取りけるも、井上あやうく見えにける所に、野村市左エ門、後藤太郎、助手勢を引連れ駈け来たり、黒田方、弥々氣を上げましえいやくと突いて掛かる。大友方こらえかねて崩れける。

かゝる所に野上山城切て出で、敵六騎討ち取り引かんとせる所に、黒田方より石松右エ門駈け合せ野上を討取る。

又大友方より富来右兵エと名乗って出るを、黒田方より松隈藤三郎討ち取る。吉良伝右エ門をば黒田方天野勘左エ門討取る。同加賀野新兵エは五騎討取り、其の外堀尾与左エ門、富田仁左エ門、原田市蔵等、皆高名をぞしたりけり。

(不明)を始めとして高名の侍三十六人、雑兵三百余騎、井上手より討ち取りたり。大友方竹田作之進を黒田方野村市右エ門、古庄嘉平次兩人にて討取る。岐部山城をば笹蔵嘉兵エ討取る。その他酒井右エ門、瓜田伝内、後藤田、小栗治郎左エ門、二宮右馬之助なども高名す。大友方峯民部は黒田方時枝平太夫を討取る。池田九郎兵エは五騎、富田仁左エ門は二騎各々討取る。

かくなりける程に互に勢を尽し引退く、井上九郎右エ門は軍の様子、久野が討死の次第富来の城に申し上ぐれば、

如水公この由聞き給い、千騎一騎の久野を討たせけるこそ無念なりと御落涙あり。この上は富来城はともかくも、先づ吉畠を討たんとて打ち立ち給う。阿岐の城より熊谷佐助と名乗りて出で、熊谷内蔵は毛利方にて関ヶ原に罷在り、城代としてそれがし番仕る所に御馬を向けらる、事神妙に候、相手にとって不足ながら、矢一筋参らせんとぞ申しける。

如水公聞こし召し、あれやさしき事申すかな、栗山四郎左エ門手勢を伏せおき、敵討て出でなばことごとく討取るべしと、岡田三四郎、本田半三郎、山脇弥七郎等其他鉄砲差添えられ、黒田三左エ門、後藤又兵エ兩人は甲斐守長政に従い関ヶ原に在りければ、三左エ門の手の者の江見彦右エ門、粕屋茂兵エ、進藤嘉エ門、関甚六など、如水公の御供にあり候えばこれを添えず、先手の勢は立石に叩えさせ旗本も引取り給う。

案の如く敗北と心得、城中より討て出る。栗山案の凶に敵を引受け一度にどつと駈け出で、中にとり込め慘々に戦いことごとく討取る。敵方熊谷仁左エ門をば津田才蔵、高畑兵部を山脇権之助、同嘉兵エを船引刑部が討取る。細江弥七は敵三騎、三宅利右エ門は四騎、岡田三四郎は五騎を

討取る。小林勘右エ門は大身の鎗にて敵七騎を突伏す。熊谷佐助これを見飛んで出て忽ちに十七騎を切伏せけり。小林勘右エ門之と掛け合せ熊谷を突伏せ討ち取る。熊谷は大力と聞えし剛の者なれど三十四才にて討死せり。阿岐城すでに落城しければ如水公は直に立石へと急ぎ給う。

大友義統は一騎当千と頼みたる吉弘、宗像を始め宗徒の勇士大勢討たれば勢力尽きて唯茫然たる所に、如水公は森太兵エを召して、只今大友を討つは案の内なれども、衰えたるを討つは仁義にあらず、汝が方より田原紹忍方へ使を遣はし降参すべし。さすれば士卒皆々助くべしとありければ、義統公、「我この度本国に打ち入るといへども詮なくて、如水公軍門に出給へば軍兵さまへに落失せり。」かくて如水は大友を引具し中津に帰陣し給う。

ここに加藤清正この取合い聞いて豊後へ三千余騎の加勢を出しけるに、黒田へ降参の跡になり、玖珠郡まで来たれども本意なく肥後へ帰りけり。玖珠、日田の侍七百騎これも手に入らず引返えす。

今四五日もこらえ給はゞ又大勢になるべきに、これと言ふも宗麟公神仏をかるしめ給う御罰のがれがたく、武運尽きさせ給うこそうたてけれ。

かくて如水公は中津へ帰陣の上今度軍忠の輩に恩賞ありて、久野が弟十二才になりけるを久野仁左エ門と改められ新地給わりけり。

それより小倉の城主毛利壱岐守が家臣毛利九郎右エ門が居城広寿嶽に使を立て、城を明渡さざれば攻め落とすべしとありければ、九郎右エ門とかくに及ばず長男吉十郎を如水の勢に加えけり。それより小倉の城に押寄せ使者を以て、「我豊後へ打越し大友を退治し、阿岐、富来の城残らず我手に属す。当城の儀明渡すべきなり。異議あらば軍勢差向うべし」とありければ、壱岐守、家臣共集め評議しけるに、皆一同に申し候には、近国の城悉く如水の手に従い候上、濃州関ヶ原合戦も西国方の敗北の由なり。この城にて討死なされても誰が為になり給はん。如水の指図に任せられるがよろしからんと申しけり。壱岐守尤も同じく城を渡しけり。

それより筑後柳川表も討ち従え九州過半一統しければ、其後大友を引具し上府あるに家康公御感斜めならず、これ単えに如水老将の勲功なりと筑前の州を一圓に領地に給はりけり。

(年月日・筆者の記載なし)